

标准日语 中级教程

下册

原著者【日本】東京外国語大学留学生日本語教育センター

张慧明 黎珂 丁国旗 庞黔林 张秀强 崔勇 / 编注

BIAO ZHUN
RIYU ZHONGJI JIAOCHENG



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

标准日语中级教程

下 册

原著者 [日本] 東京外国語大学留学生日本語教育センター

张慧明 黎珂 丁国旗 庞黔林 张秀强 崔勇 编注

北京大学出版社
北 京

著作权合同登记 图字: 01-2002-5322 号

本书的副课文部分(テキスト二)和练习册的鉴赏部分采用了[日]東京外国語大学留学生日本語教育センター编著的『上級日本語』的内容,由東京外国語大学授权北京大学出版社出版。

图书在版编目(CIP)数据

标准日语中级教程.下册 / 東京外国語大学留学生日本語教育センター编著; 张慧明等编注. —北京: 北京大学出版社, 2005. 3

ISBN 7-301-07941-9

I. 标… II. ①東… ②张… III. 日语-高等学校-教材 IV. H36

中国版本图书馆CIP数据核字(2005)第 010629 号

书 名: 标准日语中级教程(下册)(附练习册)

著作责任者: 张慧明 黎珂 丁国旗 庞黔林 张秀强 崔勇 编注

责任编辑: 杜若明

标准书号: ISBN 7-301-07941-9/H·1201

出版发行: 北京大学出版社

地 址: 北京市海淀区中关村北京大学校内 100871

网 址: <http://cbs.pku.edu.cn>

电 话: 邮购部 62752015 发行部 62750672 编辑部 62753334

电子邮箱: zpup@pup.pku.edu.cn

排 版 者: 华伦图文制作中心

印 刷 者: 世界知识印刷厂

发 行 者: 北京大学出版社

经 销 者: 新华书店

787 毫米×1092 毫米 16 开本 21 印张 485 千字

2005 年 3 月第 1 版 2005 年 3 月第 1 次印刷

定 价: 32.00 元 (含练习册)

前 言

本书是为大学日语专业编写的精读教材，供二年级第二学期使用。本教材所需教学时数约 144 学时，在编写的过程中也充分考虑到其他有相应基础的日语学习者的需要。为了方便使用，现对该教材作如下说明。

一、教材的构成

该教材由两册组成。即《标准日语中级教程·下册》和《标准日语中级教程下册·练习》两本书。

1. 《标准日语中级教程·下册》

《标准日语中级教程·下册》有 10 单元课程内容。每个单元均由以下几个部分的内容构成。

- (1) テキスト一（课文一）：这部分是编者自己精选的日语原文，其中一些文章参考了本校传统教材的内容，保留一部分文章和教材形式，但编写的理念有了改变。对词汇、语法、练习等内容进行了重新编写。另外根据题材和内容的需要选用了一部分新的文章。为了便于使用者参阅原文，每篇文章后一般绘出作者简介、文章出处等内容。
- (2) 単語（词汇）：单词中的汉字都标注了假名。单词后面加注了音型（アクセント）和词性。对单词仅给出了日文解释，没有中文翻译，这一点与《标准日语中级教程·上册》不同。为了避免重复，单词部分原则上不包括其后出现在「言葉遣い」「文型」中的词汇。
- (3) 言葉遣い（用词）：考虑到该教材的学习者业已掌握日语基础语法，语法的学习重点不再限于一般性介绍，应该有些深度和广度。本教材重点介绍词的用法和句法。前者的介绍由「言葉遣い」来承担，后者的介绍由（4）「文型」承担。可见本教材的语法内容分解为以上两个部分，因而在课文部分没有使用“语法”这一术语。
- (4) 文型（句型）：应该说该部分的内容与（3）「言葉遣い」没有绝对的分界线，因为介绍句型离不开词，但该部分的侧重点在于介绍句型结构的语法意义，而不是单纯的词义。

- (5) テキスト二 (课文二): 该部分采用了东京外国语大学留学生日本語教育中心所编《上級日本語》(1998) 第一部分共十课的内容。文章的先后次序作了调整, 与原书不同。

2. 《标准日语中级教程下册·练习》

练习册的内容:

- (1) テキスト一 (课文一) 的练习。作为练习内容分类, 使用了「文法」(语法) 这一术语, 目的在于复习基础语法的一般性知识。
- (2) 鉴赏。这部分采用了东京外国语大学留学生日本語教育中心所编《上級日本語》(1998) 第二部分的内容, 目的在于使学习者能够集中接触到较多的文章体裁。
- (3) 参考答案。该部分由テキスト一 (课文一) 和テキスト二 (课文二) 的参考答案构成。
- (4) 课文单词总表。按五十音顺列出了テキスト一 (课文一) 的单词, 单词后数字表示课文序号。
- (5) 课文语法 (言葉遣い・文型) 总汇。按单元单位汇总了テキスト一 (课文一) 的语法内容。

二、凡例

1. 音型

采用数字形音型标示方法。如: ①、②、③等。

2. 略称

名詞	【名】	形容詞	【形】
形式名詞	【形名】	形容動詞	【形動】
代名詞	【代】	形容動詞トタル	【形トタル】
他動詞五段変化	【他五】	副詞・擬声擬態語	【副】
他動詞上一段変化	【他一】	接統詞	【接】
他動詞下一段変化	【他一】	接統助詞	【接助】
自動詞五段変化	【自五】	格助詞	【格助】
自動詞上一段変化	【自一】	終助詞	【終助】
自動詞下一段変化	【自一】	副助詞	【副助】
自・他動詞五段変化	【自他五】	感動詞	【感】
自・他動詞上一段変化	【自他一】	接尾語	【接尾】
自・他動詞下一段変化	【自他一】	接頭語	【接頭】
サ変他動詞	【サ他】	連語	【連語】

サ変自動詞

【サ自】

連体語

【連体】

助動詞

【助動】

補助動詞

【補助】

3. 符号

符号	意 义	符号	意 义
V	动词辞书形、终止形	V たら	动词过去时假定形
V た	动词、动词性助动词的过去时	V て	动词「て」形（连用形）
V ば	动词假定形	V +	动词连用形
V ない	动词否定形式	A n な	形容动词连体形
A	形容词辞书形、终止形	A n	形容动词词干
A -	形容词词干	N	名词
…	句子或句子以上单位省略	～	句节的一部分或单词省略
—	词素省略	cf.	比较，对比；confer
・	以及	→	近义词
/	或者	←→	反义词

三、编辑分工

具体分工如下（姓名按笔顺排列）：

丁国旗：第 6、10 课

张秀强：第 2 课

张慧明：第 5、7 课

庞黔林：第 4、8 课

崔 勇：第 9 课

黎 珂：第 1、3 课

以上人员承担了各自负责的「テキスト一」的选材、编注，「テキスト一」练习及答案的编注以及「テキスト二」答案的编注，并完成相应部分的校对。教材的主编工作由张慧明承担。

还应一提的是该教材选用了本校传统教材的选文，我们感谢前任编注人员的提示。特别是本次编写过程中，有几位参加编写的教师因为自身的工作学习等原因，中途退出了编写，对他们的工作我们同样表示感谢。

日籍专家長谷川幸生教授及夫人長谷川由纪子女士对文稿进行了审阅。在此谨表谢意。借此机会，对大力协作出版此教材的北京大学出版社表示感谢。

水平所限，个中谬误，在所难免。恳请批评指正。

编 者

2004 年 8 月 30 日

目 次

ユニット I	1
テキスト 一 おしゃべり	1
テキスト 二 日本におけるマス・コミュニケーション状況 の特質について述べよ	17
ユニット II	20
テキスト 一 良寛さま	20
テキスト 二 人は何のために生きるのか	37
ユニット III	41
テキスト 一 日本人の言語表現	41
テキスト 二 文化摩擦	56
ユニット IV	68
テキスト 一 カナリヤと少女	68
テキスト 二 俵万智と読む 恋の歌 百首 (一)	84
俵万智と読む 恋の歌 百首 (二)	86
ユニット V	88
テキスト 一 緑と青の自然	88
テキスト 二 地球環境問題 ねったい うりん 熱帯雨林の減少と さばく か 砂漠化	100
ユニット VI	105
テキスト 一 風景開眼	105
テキスト 二 (一) 私の読書術	120
(二) 会えないけど長続きする人がいる	122

ユニット VII		124
テキスト 一 古いものと新しいもの		124
テキスト 二 機械との共存		137

目 次

ユニット VIII		143
テキスト 一 坊っちゃん		143
テキスト 二 オープン・システムとしての生命体 ^{せいめいたい}		166

ユニット IX		171
テキスト 一 日本の庭		171
テキスト 二 余暇		186

ユニット X		191
テキスト 一 走れメロス		191
テキスト 二 創造する人		210

ユニット I

✧ テキスト 一

おしゃべり

しばた たけし
柴田 武

先日こういうことがありました。わたしの先輩に当たる人のところへあることを頼みに行きましたが、その返事は今夜まで待つてほしいということです。今夜、正九時に電話をかけてほしい。電話でイエスか、ノーか、返事をしよう。こういうことでした。

わたしはちょうど、外へ出ていましたので、町の赤電話^{あかでんわ} (1) から正九時、九時かっきりに電話をかけたのですが、お話し中です。五分ほどたって、また、かけましたが、やはりお話し中です。近くの喫茶店へ入って、十分ほどたったところで、今度は店の電話を借りてかけたところ、まだお話し中です。それから、喫茶店で約一時間半、八回目に、初めて通じました。

電話口に出られた先輩に、正九時の約束を守られなかったこと、それからずうっと何回も電話をかけたが、お話し中だったことを話すと、実は、九時ちょっと前に娘のところへ電話がかかってきて、一時間半ほどの長電話をしていた、どうも困ったものだ、というお話でした。

わたしとしても、一時間半、時間をむだ使いしましたし、そのあいだ、じりじりと落ち着かなかったのですから、たいへん困ったり、たいへん迷惑したりしたのですが、考え直してみると、この長電話には一つの意味が含まれていると思います。

この長電話の内容は知るよしもありますが、恐らく、ボーイフレンドか何かからの電話だったのではないかと思います。そして、特別の用件があっ

たのではないと想像します。伝えなければならない何かがあつて、それで電話をかけてきたのではなく、ともかく、話をしてみたい、話しているうちに、話すことが次から次へ出てきて、それで一時間半話し続けた。これが実状ではないかと思います。

この一時間半の長電話で、送り手も受け手も、気分がせいせいし、満足して受話器を置いただろうと思います。これは、井戸端会議^{いどばたかいぎ} ⁽²⁾の新しい形ではないでしょうか。

電話が普及したことと、電話の声が直接話しているのと同じように明瞭に聞き取れるようになったことと、顔を見なくても、顔を見て話すと同じように話すことに慣れたということが、こうした長電話ができる原因になっていると思いますが、動機そのものは井戸端会議とちっとも変わりません。

井戸端会議と変わらないというのは、言葉が楽しまれているということです。言葉の主な目的は、何かを伝えることにあります。言葉がコミュニケーションの道具などと言われるのはそのためですが、言葉には、もう一つ、別の面があります。それは、いわばレクリエーションのための言葉ということです。ここでは、言葉は道具ではなく、言葉それ自身が対象になっています。言葉それ自身がおもちゃになっているわけです。

若い人たちの長電話も、昔の井戸端会議も、レクリエーションのために言葉を交わす場と言っていいと思います。ですから、何か伝えたいことがあつてかけるのではない。ニュースがあつて集まるのではない。話していること、おしゃべりそのものが楽しみというわけです。

わたしなど、大正^{たいしやう} ⁽³⁾生まれの者は、おしゃべりは、なにか悪いこと、慎むべきことのようにしつけられてきました。「おしゃべり」という言葉自身、むだな言語行為、余分な言語行為という意味を持っています。「おしゃべりをするな」ということは、子供のとき何度も聞かされましたが、「おしゃべりをしなさい」ということは、あまり聞きませんでした。

おしゃべりが悪徳のように言われたのは昔からで、貝原益軒^{かいばらえきけん} ⁽⁴⁾の「養生訓」^{ようじやうくん} ⁽⁵⁾の中にも、たびたび「言葉を少なくせよ」「言葉を慎め」ということが出てきます。

それが、日本の昔風の養生だったわけですが、今や、おしゃべりがレクリエーション、養生になる時代です。

フランス人とか、フランス以外の国の人でもフランス風な修養を身につけた人は、おしゃべりを積極的に楽しむ習慣を持っています。よく、いっしょに食事をした後、「さあ、今度はおしゃべりをしましょう。」と言って、ロビーか何

かで、おしゃべりそのものを楽しむことに誘われます。「フランス式のごちそう」と言うと、おしゃべりすることを言います。言葉のごちそうということです。

貝原益軒の時代よりは、我々はおしゃべりを楽しむようにはなりましたが、これがまだ積極的な楽しみにはなっていないように思います。パーティーで知らない人と席が隣どうしになる。しかし、その人とは積極的に話そうとしない。黙^{だま}ってお互いに偵察^{ていさ}していて、ついに帰るときまで、言葉をかけないで終わる。それで、今日のパーティーはおもしろくなかった、肩がはったなどと言います。こういうことは、実は、わたし自身、その経験者です。

どうして、こういうとき、隣の人に言葉をかけないのでしょうか。パーティーでは、言葉をかけ、言葉を交わして楽しむことが目的のはずです。ところが、そういう席でも貝原益軒^{ねづよ}式の養生^{ようじやう}で、言葉を慎み、言葉を惜しむ習慣がわたしたちの周りでは、相当根強いように思います。

おしゃべりすることで、その人と親しくなる。親しくなるところまでいなくても、顔見知りになる。ここでは、何か内容のあることを話すのではない。いや、むしろ、内容のないことのほうがいい。ともかく、言葉を交わすことが、その人へ心の懸け橋を渡すことになるのです。

相手が外国人で、日本語が話せないときには、今度は、言葉自身が壁になります。そういうとき、こちらが相手の言葉を、片言^{かたこと}でもいい、口にするのができれば、相手はどれだけ親しい、くつろいだ気分になれることか。ことに、その言語が、英語とかフランス語とかのような国際語でない場合、その言語の片言、例えば、「ありがとう」とか、「さようなら」とかいう言葉だけでも知っていたら、全然知らないよりは、どれだけいいことか。

外国人とのことはさておいて、日本人どうしのあいだでおしゃべりをするのに、第一に大切なことは、話題を早く変えるということです。フランス人の話では、一つの話題に三分以上かけないのが、楽しい会話のこつだと言います。なるほど、一つの話題を深く追いすぎると、それは、楽しみではなく、苦しみになります。

おしゃべりを楽しむこつの第二は、話題をとぎれさせないこと。どうも、わたしなどは、人と話していて、ときどき、どちらからも話しかけないことがあります。おおぜい集^つま^やったときでさえ、しばらく全く発言のない時間があります。これを、「お通夜^{きんもつ}みたいだ」と言うように、おしゃべりにとって、これは禁物です。フランスではこういう無言^{むごん}の時間ができると、「天使のお通りだ」といって、次の話題^{うなが}を促すような努力をします。

おしゃべりは、一つ一つの話題を短く、しかも、とぎれさせないこと、これがこつだと思います。

ところで、言葉のレクリエーションの面、これはあくまでも一つの面であつて、言葉の本来の機能はコミュニケーションですから、やはり、わたしたちの社会生活とは、コミュニケーション優先でいかないと、いろいろ困ったことが出てきます。最初にお話しした、先輩のお嬢さんの長電話も、やはり困ることの一つには違いありません。

それから、しゃべるということは、気持ちを散漫にする恐れもあります。貝原益軒が、言葉を慎めと言うのも、ある面の真理をつかんでいます。少なくとも、ものを考える、筋道立てた思考をするのには、おしゃべりから遮断された時間を必要とします。

近ごろは集団思考といって、おおぜいがしゃべっているあいだに、ある新しい考えを獲得する、そういうことに若い人は慣れてきていますが、しかし、自分で考えをまとめてこない人たちが、その場でがちゃがちゃ騒いでも、ほんとうに深い、遠くまで見通した考えを得ることは難しかろうと思うのです。

おしゃべりをして楽しむことも大切ならば、おしゃべりをしないで考える時間を持つということも、それに劣らず大切なことです。この二つを使い分ける。互いに積み重ねていく、そのことが実は最も大切なことではないでしょうか。

著者

柴田 武 一九一八年名古屋市生まれ。東京大学文学部卒業。国立国語研究所を経て、東京外語大学、東京大学、埼玉大学の教授を歴任。現在、東京大学名誉教授。専攻は方言地理学、社会言語学。長期にわたり、NHK テレビ『日本語再発見』に出演。一九八五年、NHK 放送文化賞を受賞。

出典

『新編 新しい国語・二』の「言葉と社会」より。

注

- (1) 赤電話③＝公衆電話の古い言い方。
- (2) 井戸端会議⑤＝共同井戸の付近で主婦が、水汲みや洗濯をしながら世間話などをするをからかっていう語。
- (3) 大正＝日本の年代の一つ。一九一二～一九二五年の間。
- (4) 貝原益軒＝江戸前期の儒学者、本草家、教育思想家。築前生まれ。名は篤信。始め損軒と号した。福岡藩儒。朱陸兼学から朱子学に帰し、本草などにも目を向け、博物学的実証主義に立って窮理の道を重視。著『大疑録』、『大和本草』、医書の『養生訓』、子女の教育を説いた『和俗童子訓』な

ど多数。

(5) 養生訓③＝貝原益軒の著書。

単語 &

- たの 頼む ②
しょう 正 一
かつきり ③
- お話し中 ⑩
- きつ 喫茶店 ③③
- むだづかい 無駄使い ③
- じりじり ①
- おちつく 落ち着く ④④
- な おす 一直す
- よし 由 ①
- 知るよしもない
- じつじょう 実状 ⑩
- おく 送り手 ⑩
- う 受け手 ⑩
- せいせい ③①④
- めいりょう 明瞭 ⑩
- どうき 動機 ⑩
- 【他五】 してくれるように願う。依頼する。
- 【接頭】 端数の無いことを表す。
- 【副】 単位量のちょうど整数倍であり、端数の無いことを表す。
- 【名】 [電話で]ある二人の人の間に通話が行われているために、そのどちらにも電話がつかない状態。
- 【名】 コーヒー、紅茶、ケーキなどを出す飲食店。都会人などがしばしの憩い・待ち合わせ・簡単な用談などのために利用する店。
- 【他サ】 金などを必要以上（役に立たないこと）に使うこと。
- 【副】 なかなか希望通りにならず、いらいらすることを表す。
- 【自五】 環境の変化や外界の雑音や他人の栄達（批評）などに心を動かされず、マイペースを保つ。
- 【接尾】 気分・観点・方法などを改めて、もう一度何かをする。
- 【名】 手段、方法；そうであるだけの理由や事情。わけ。
- 【連語】 知る方法がない。知ろうはずがない。
- 【名】 実際の状況。
- 【名】 送る人。
- 【名】 受ける人。
- 【自サ】 それまでの不快やわだかまりなどが解消して、気分がさっぱりと晴れやかになることをあらわす。
- 【形動】 あいまいな点がどこにも感じられない様子。明確。
- 【名】 人の意思決定や言動の直接的な原因・理由、また、目的となるところのもの。（広義では、きっかけの

コミュニケーション ④	【名】	意にも用いられる)	[communication]言葉による意志・思想などの伝達。
言わば ②①①	【副】		他の表現で置きかえるなら(観点を変えるなら)、次のようにも言えるだろう、ということを表す。
レクリエーション ④	【名】		[recreation]仕事・勉強の疲れをほぐし、あすの活動への活力を導くための休養と娯楽。リクリエーション。
一身 ^{ししん}	【接尾】		当のそのもの。
おしゃべり ②	【名】		(肩の凝らない話題で)人と雑談をすること。また、その雑談。むだ話。
言葉をかける ③-②	【連語】		話しかける；声を掛ける
慎む ^{つつし} ③	【他五】		調子に乗ってあやまちを犯すことのないように気をつける。
しつける ③	【他一】		礼儀・作法を仕込む。
余分 ^{よぶん} ①	【形動】		必要とされる量をはるかに超えていること。
悪徳 ^{あくとく} ①	【名】		道徳に反した、悪い行い。不道徳。
たびたび ①	【副】		一回や二回でなく、繰り返し行われる(起こる)ことを表す。
修養 ^{しゅうよう} ①	【名】		心の持ち方・対人行動に気をつけ、他人の人格を重んじ、自分の人格を高めること。
ロビー ①	【名】		[lobby]ホテル・会館などの玄関近くに在って、だれでも自由に出入りできる休憩・談話用の広間。
ご馳走 ^{ちそう} ①	【名】		おいしい(りっぱな)料理。
偵察 ^{ていさつ} ①	【他サ】		敵や相手の動き(様子)をこっそり探る。
惜しむ ②	【他五】		十分に出さないで済ませようと思う。
相当 ^{そうとう} ①	【副】		程度が普通よりはなはだしい(すぐれている)ことを表す。かなり。たいへん。
根強い ③	【形】		しっかり根を張っていて、簡単に崩れたり衰えたりしない。[しつこい意にも容易に改められない意にも用いられる]
顔見知り ^{かおみし} ①	【名】		以前会って、顔を知っていること(人)。
片言 ^{かたこと} ①	【名】		(言語習得が不十分で)その言語の標準的な表現としては整っていない物の言い方。
どれだけ ①	【副】		数量・程度などをはっきり限定出来ないことを表

くっぴ 寛ぐ ③	【自五】	（気がかりな事や仕事の事などを忘れて）ゆったりと心身を休める。
こくさいご ① こつ ①②	【名】	世界じゅうに通用する言語。
	【名】	〔→骨法〕物事をうまくやる上で、外してはならない大事な点。
とぎ 途切れる ③	【自一】	〔跡切れる意〕今まで続けて行われているものがそこで（途中で）しばらく切れる。
おつや お通夜 ②	【名】	死者を葬る前に、家族や親しい人たちが棺の前で一晩過ごすこと。つうや。
きんもつ 禁物 ①	【名】	それをしたり受け入れたりしてはいけない（しない方がいいとされる）事。
むごん 無言 ①	【名】	物を言わないこと。
うなが 促す ③	【他五】	迅速（積極的）に実行に移してほしいと、要請する。
さんまん 散漫 ①	【形動】	気持が集中せず、仕事にまとまりのない様子。
つか 掴む ②	【他五】	大事な点や物を確実に捕らえる。
すじ道 筋道 ②①	【名】	（それに従えば、納得してもらえる）正しい考え方（話し方）の順序や、物事の道理。
しきだん 遮断 ①	【他サ】	流れを、そこでぴったりと止めること。
かくとく 獲得 ①	【他サ】	（苦心や努力をして）自分の物とすること。
まとめる ④①	【他一】	纏まるようにする。
がちやがちや ①	【副】	騒々しい様子。
みとお 見通す ④①	【他五】	そのものの表面に現れている事に基づいて、その裏に隠されている事柄や将来の動向などについて予測する。
おと 劣る ②③①	【自五】	（価値・能力・数量などが）他に比べて、悪い（少ない）状態にある。及ばない。
つみかさ 積み重ねる ⑤	【他一】	（自分に課せられた仕事を）順に追って着実にを行い、所期の成果をあげる。

言葉遣い ㊂

1. どうも ① [副]

- 1) (現状や自分の感覚、感情について、「なぜそうなるのか／そのように感じられるのかよく分からない」という話し手の「いぶかしみ」の気持ちを表す。述語には打ち消しの表現を伴う) どうしても。どう考えても。
(ア) 朝から考えているのだが、どうもわからない。
(イ) 何回も練習したが、どうも上手にできない。
(ウ) 努力はしているのだが、どうもうまくいかない。
(エ) あの人の考えていることは、どうもよく分からない。
- 2) («そうだ(様態)」「ようだ」「らしい」などを伴い、一定の根拠に基づいた話し手の推定を表す) どうやら。なんだから。
(ア) この二、三日どうも腹の具合が悪い。
(イ) 最近、彼はどうも様子がおかしい。
(ウ) 母のことがどうも気になってならない。
(エ) この空模様では、どうも雨になりそうだ。
(オ) 彼の言ったことは、どうも全部うそのようだ。
- 3) («困った」「まいった」などを伴って、困惑や軽い驚きの気持ちを強調し、または、挨拶の表現に用いられ、感謝やおわびの気持ちを強調する) とても。ほんとうに。
(ア) 数学はどうもむずかしい。
(イ) 先日はどうもありがとうございました。
(ウ) ちっとも勉強しないで遊んでばかりで、どうも困った息子です。
* どうも困ったものだ。

2. じりじり ① [副]

- 1) (少しずつではあるが、確実な変化が見られることを表す) すこしずつ。しだいに。
(ア) 開業二か月目あたりから客足はじりじりと伸び始め、夏休みには一日九百人も押しかけた。
(イ) じりじりと敵に迫る。
- 2) (変化が徐々に進んで結局／決定的段階／を目前にすることを表す) やがて。結局。
(ア) 二代目は築いた王国がじりじりと崩壊するのをただ見まもっていたのであ

る。

- (イ) 平素の不注意がじりじりと大事件につながってしまった。
- 3) (強い熱気が対象に加わることを表す) 熱々と。激しく。
- (ア) 太陽がじりじりと照りつける。
- (イ) じりじりと熱気が地面から迫ってくる。
- 4) (なかなか希望通りにならず、いらいらすることを表す) いらいら。はらはら。
- (ア) どこに置いたのか、まったく覚えていない。じりじりと落ち着かなかった。
- (イ) 約束の時間になっても、まだ来ないので、じりじりしてきた。
- (ウ) 待ち遠しくてじりじりする。
- * そのあいだ、じりじりと落ち着かなかったのです

3. Nそのもの (名詞の後につく)

- 1) Nそれ自体。
- (ア) 地震そのものによる被害も大きいが、その直後の火災でなくなった人も少ない。
- (イ) 機械そのものには問題はないが、ソフトに問題があるようだ。
- (ウ) この本がつまらないんじゃない。読書そのものが好きになれないんだ。
- * 動機そのものは井戸端会議とちっとも変わりません。
- 2) (何かに例えて、その通りだということを強調するのに使う) Nそのとおり
- (ア) その合唱団は天使の歌声そのものだ。
- (イ) あの映画は彼の人生そのものだ。

4. ともかく ① [副]

- 1) (意志的な行為を表す動詞を伴い、いろいろ議論するよりも、まずは実行するという意味を表す) とにかく。一応。
- (ア) 何がよい記事だかわからないが、ともかくわかり易い記事を書くように心掛けています。
- (イ) できるかどうかかわからないが、ともかく一度やってみよう。
- (ウ) ともかくお医者さんに見てもらったほうがよい。
- (エ) ともかく、言われたことだけはやっておきました。
- (オ) ともかく使ってみないにはいい製品かどうか分からない。
- * ともかく、話をしてみたい。
- 2) (「それは議論の対象からはずして」という意味を表す。それよりも大事なこと